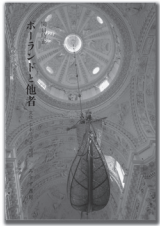


井上 暁子

関口時正『ポーランドと他者 文化・レトリック・地図』（みすず書房、2014年）



本書は、東京外国語大学名誉教授であり、ポーランド文学研究者・翻訳者として著名な関口時正氏による論文・学術エッセイ集である。1980年代から現在までの間に論集やカタログで発表された18本が収録されており（新たに書き下ろされたのは「ポーランドと他者」と題されたプロローグのみである）、その内容は、ポーランド人の自己像・他者像、民族意識、美術、映画、音楽、演劇など、きわめて多岐にわたる。

本書のタイトルは、著者が1970年代半ば初めてポーランドを訪れた際の経験をもとにしている。周知のように、当時ポーランドは社会主義陣営に属しており、政治経済体制上の区分でいえば「東」側にあった。日本人留学生であった著者は、「西側世界から来た東方の人間」として、ポーランド人に対し「大きくねじれた」他者性を示すことになった、という。ポーランドは社会主義陣営の中では比較的統制が緩やかだったと言われるが、政治、経済、人の移動だけでなく、知や文化そのものが分断されていた当時、「アジアから西側の文化をたずさえてやって来た日本人青年」がポーランド人にどれほどのショックを与えたかは容易に想像がつく。氏はこう書いている。「[ねじれは]たとえば当時はまだ禁書であって一般のポーランド人が読めなかったゴンブローヴィチのテキストを、翻訳ではあってもすでに知っていて、読んだ上でポーランドにやって来たというようなこととか、精神のかなりの部分をヨーロッパやアメリカの文化によって形成された人間であるというようなことにむしろ顕著にあらわれた」（p.335）。

本書で問題になるのは、「ポーランド人にとっての他者像」と、それによって形成された「自己像」だ。その結果、本書で主に論じられるのは「外なる他者」、すなわち「ヨーロッパ」人が「アジア」イメージを形成するのに必要だった「タタール人」「トルコ人」（場合によってはここに「ロシア人」も付け加わる）のイメージである。これについては、二つの章にわたる「ポーランド『防壁論』のレトリック」と「ヴォウオディオフスキ殿とカミュニェツへ」で論じられており、自己のアイデンティティを規定したり強化したりするために他者像がいかに必要不可欠であったかが明らかにされている。

「他者」の問題と並んで本書を特徴づけるのは、「文化の境界を超える人々」に対する著者の強い関心である。これは「西／東」「ヨーロッパ／アジア」の境界を超える人物にスポットを当てるとい話にとどまらない。比較文化・文学研究者としての関口氏が、いわば確信犯的な「他者」となって両文化に入り込み、一般読者や専門家の「思い込み」を、鮮やかに、しかし、対象に対する敬意と愛情をもって切り崩すのである。

たとえば、本書においてショパンは、単なる（と言っては何だが）世界的に有名な作曲家・ピアニストとして論じられるのではない。「ポーランドの英雄、民族の代表選手」のイメージでみられているショパンがいかにロマン主義的ではなく、農民音楽やユダヤ音楽との接触をもっていたかが書簡から明らかにされる。

「ボレスワフ・プルス日本論」は、元は言えば1997年「ボレスワフ・プルス生誕150周年記念国際会議」の委嘱を受けて書かれたもので、19世紀末から20世紀初頭に活躍した大作家プルスによって書かれた「日本論」が題材となっている。『日本及び日本人』と題されたこの論考は、1904年4月から6月にかけて、のべ23回にわたり日刊新聞の第一面で連載されたが、未完だったためにプルス全集に収録される

ことはなく、現地のポーランド文学研究者の間でも知られていなかった。時事・文藝・文明評論家としてのプルスが、日本について書かれた様々な文献を読み、錯綜する情報を駆使して構築しようと試みた日本像は、当時のポーランド人にとっての他者像、自己像を理解する上できわめて貴重な資料である。

岩波講座『文学』第13巻『ネイションを超えて』（岩波書店、2003年）に収録された「ポーランド語文学を語り続ける〈民族〉」は、ポーランドの「民族」意識の形成と国語の密接な関わりについて論じたものである。分割時代の120年間、彼らにとってポーランド語を守ることは一種の「文化闘争」だった。亡命地であれ、言語統制が厳しかったロシア領やドイツ領であれ、彼らは強烈な「自己言及」を繰り返した。その中で、ポーランド民族の苦悩をキリストの受難に重ね、「ヨーロッパの救世主」という自画像が作り上げられたことが示されている。

その他「カントルのクラクフ」や「ケシロフスキのポーランド」のように、すでに日本で知名度のあるポーランド人芸術家の優れた解説として読むことができる章もある。読者はあらためてポーランド文化に親しむきっかけを得ることだろう。

最後に、ささやかな問いを立てることが許されるならば、それは本書で扱われた様々な問題の「その後」についてである。社会主義体制の崩壊、ポーランドの欧州連合加盟を契機として、「他者」をめぐる議論はポーランド国内で一層複雑になり、再考を促された。その規模は、氏が指摘する「ヨーロッパへの帰属意識」の再燃や、「ヨーロッパの新たな自己規定、ないし、そこでポーランドが果たす役割」の問題をはるかに超えている。とくに、プロローグで「内なる他者」の例として挙げられている「ユダヤ人」や少数民族の問題は、現在のポーランドにおける「民族」や「文化」をめぐる認識に影響を及ぼしている。伝統的「クレスィ」文学や20世紀初頭のそれらをめぐる言説、プルス日本論なども、今日のポーランドにおいて新しい光の下で再検討を加えられている。

もっともこれらの疑問点を抜きにしても、本書は極めて豊かで、ポーランド文学・文化の魅力を十分に伝えてくれるものである。研究者・翻訳者として、またポーランドと日本の文化交流の懸け橋として尽力されてきた氏に、この場を借りて心から感謝したい。